

丹波篠山市史編さんだより

第3号
令和6年12月



(市史編さん課所蔵)

渡瀬橋の渡初式

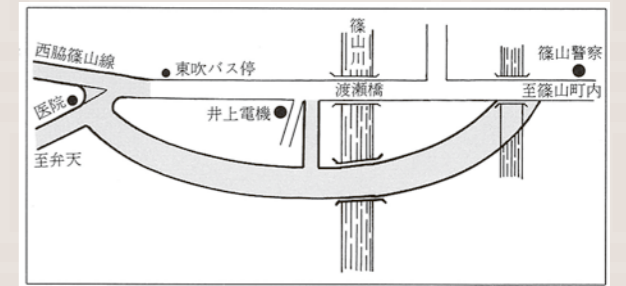
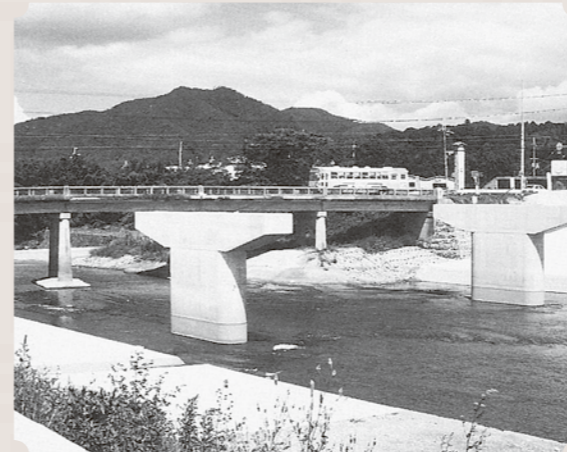
—昭和4年10月11日—

「渡瀬」という名前は、橋がなかった時代に人々がこの浅瀬を歩いて渡ったことに由来します。

明治9(1876)年の地図では木橋が記載されていますが、この橋は大雨のたびに流され、歩兵第70連隊が置かれていたことも相まって、昭和4(1929)年に郡内初の頑丈な鉄筋コンクリート橋に架け替えられました。

写真は、渡瀬橋の東詰で撮影された渡初式の様子です。西吹にお住まいの溝端家三世代夫婦を先頭に、渡り初めが執り行われたことが分かります。式には工事関係者や岡野・味間小学校の児童も参加し、1000人を超える観衆が集う大祝賀会となりました。

ところで、現在のしし橋として親しまれている渡瀬橋は、写真に写っている橋ではありません。老朽化もありますが、舞鶴自動車道の開通に伴う交通量増加に対応するため、周辺道路の整備と併せて、昭和63(1988)年に少し上流の現在の位置に架け替えられたものです。



◀工事中の現渡瀬橋と ▲橋の架け替え工事の案内図
【広報たんなん202号(昭和62年9月25日)から】
現在の渡瀬橋の橋脚が川の中に作られています。その奥にバスが通っている橋が、上の写真で渡初式が行われた旧渡瀬橋です。

市史は話 古い地図と 新しい地図

さまざまな切り口から丹波篠山市の歴史や文化を調査する中で、どの分野でも重要な資料となるのが地図情報です。

古い地図で興味深いものの代表は、近世の大庄屋宅の文書にしばしば見られる村絵図です。多くは、山野の境界や利用をめぐる村落間の争い(山論)などが落着いた際に、その際の取り決めを絵図として示したものです。何枚も和紙を貼り継いで描かれた大きなものも多く、山や水路、道、屋敷がさまざまな色を使って示されています。もめ事の箇所には、どこを境界とすることとしたかなどが書き込まれており、争論の際の双方の村の庄屋や肝煎の名前、藩が仲裁した場合は立ち会った藩士の名前が書かれていることもあります。

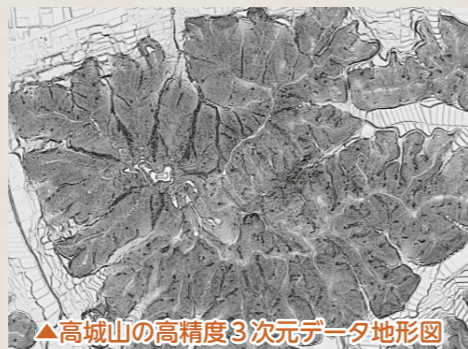
大きな絵図では、時間の経過でのりがはがれ、ぼらぼらになっていることもよくあります。当時の絵図には北を上にも描くなど現在のようないまむかしがなく、書き込まれる文字の向きもさまざまなために、復元の際には難解なジグソーパズルを解くような並べ替え作業が必要です。



▲サポーター活動での絵図復元作業

また、新しい地図の代表的なものに、考古編の調査で使われる、高精度3次元データをもとに描かれた地形図があります。

この地形図は、航空レーザ測量の結果から地表にある樹木や建物などを除き、地形の微細な凹凸だけを地図として可視化したものです。古くから京都と山陰を結ぶ要衝であった丹波篠山では、数多くの山城や古墳が造られ、それらの痕跡を地図上で確認することができます。大きな山城であれば縄張りまで分かる、技術がもたらした新しい地図です。



▲高城山の高精度3次元データ地形図

中央左の山頂に八上城の縄張りが白く写っています。

活動日	活動内容
4月	1日 市史編さん課事務所移転
	7日 第1回近現代部会
	9日 第1回地域編多紀部会
	10日 近世部会資料調査
5月	15日 近世部会資料調査
	18・19日 第1回中世部会
6月	3日 第2回地域編多紀部会
	12~30日 第5回市史編さん新発見! 資料展
	14日 第1回考古部会
	25日 第1回近世部会
7月	29・30日 第1回古代部会
	17日 近世部会資料調査
	21日 第1回市史編さん委員会・通史編専門委員会
8月	6~8日 近世部会調査合宿、第2回近世部会
	9日 第3回地域編多紀部会
	23日 第2回考古部会
9月	7日 第2回近現代部会
	11~13日 神戸大学古文書調査合宿
	18日 第4回地域編多紀部会、近世部会資料調査
10月	9日 近世部会資料調査
	19・20日 地方史研究協議会大会(甲南大学)
	26・27日 第2回中世部会、古代部会地域巡検
11月	8日 第3回考古部会
	27日 第5回地域編多紀部会
12月	14・15日 第2回古代部会
	15日 第2回市史編さん委員会・通史編専門委員会
	21日 第3回近世部会
4月~	自然環境編原稿執筆
9~10月	地域編多紀部会アンケート調査
通年	地域資料整理サポーター活動(毎週水・金曜日)

丹波篠山市史編さんだより

第3号 令和6年12月20日発行

発行 丹波篠山市教育委員会 市史編さん課
〒669-2734 兵庫県丹波篠山市宮田240 Tel 079-593-1070
※西紀支所2階に移転しました。

使ってみよう!
高精度3次元データ地形図

宮崎県統合型地理情報システム「ひなたGIS」

<https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/>

丹波篠山市史「地域編」の編さんが始まっています

— 福住・村雲・大芋 多紀地域の取り組み —

地域編編さんの目的

丹波篠山市史では、丹波篠山市全体の歴史文化を時代やテーマごとに取り上げる通史編だけでなく、地域ごとの歴史や文化に着目した地域編の編さんを行います。

丹波篠山市は広く、祭りや風習などは地域によって違いがあります。日々の暮らしの中でありふれたこととして見過ごされがちなこれらの事柄は、丹波篠山市全体をとらえる通史編の視点では漏れ落ちてしまう可能性があります。地域編の編さんは、こういった地域の歴史や文化に光を当て、地域ごとの魅力を次世代に継承することを目的としています。

また、地域編の編さんに当たっては、地域の皆さんにさまざまな形で関わっていただきながら進めています。地域編の編さんを通じて地域の「良さ」を再発見し、記憶を記録に残し、未来に向けての地域づくりにつなげることも大きな目的の一つです。



▲多紀・城東地域の合同部会の様子

地域編編さん活動のスタート

令和6年1月13日に開催した「地域編編さんキックオフシンポジウム」では、120人以上の市民の皆さんにご参加いただきました。

これを契機として、人口減少や少子高齢化が顕著な地域で、調査の緊急性が高く、また歴史文化に関する取り組みが活発である多紀・城東地域から先行して地域編編さんに取り組みることとなりました。

3月に多紀・城東地域の合同部会を開催し、4月には準備が整った多紀地域部会を皮切りに編さん活動が始まりました。

全世帯アンケートの実施

何を取り上げればいいのか、地域の人々の記憶をどうやって集めるか……。

多紀地域部会で何度も検討を重ねられた結果、個別に聞き取りを行う前段階として、情報を掘り起こすためのアンケートが実施されました。

◆住民アンケートの概要

実施期間 9～10月

実施対象 多紀地域の全世帯（60歳以上の方を中心に）

内容 村の特別な行事や昔の料理、服装や住まい、方言や遊び、その他記憶に残る日常のことについて。記述式。



▲牛耕の様子

アンケートの結果、およそ4割の世帯から回答をいただくことができました。用紙いっぱい回答してくださいという方も多く、過去に個人や地域で作成された地域の暮らしに関する資料を添付してくださいという方の回答では、家族の方が話を聞き、代筆されたものもありました。

伝統的な祭りや風習の記憶はもちろんですが、「夏にはアイスキャンデー売りが来た」家には牛がいたなど、普段の懐かしい日常の記憶もたくさん書いていただきました。

アンケートを基に、今後多紀地域部会ではそれぞれの地区にあった方法で、調査が進められます。ご協力をよろしく願います。

地域編では、明治時代に成立した旧町村域である19地区ごとに歴史と生活の記憶をまとめる計画です。

19地区には、それぞれ魅力ある歴史や文化が伝えられています。今はもうなくなってしまう、あるいは消えつつある昔ながらの風習、伝統的な農業、人生の節目の行事、言い伝えなど、皆さんの記憶に残る丹波篠山の風景とともに記録し、後世に伝えることを目的としています。

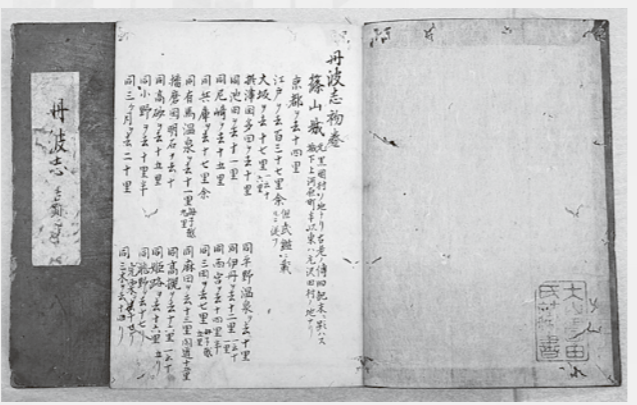
収集資料紹介

「丹波志」の編さんと大庄屋高橋家

神戸大学大学院人文学研究科特命助教 松本充弘さん

自治体史編さんに求められる役割は、地域社会に固有の歴史文化を掘り起こし、その継承を図ることです。このような取り組みは、現代に限られるものではありません。古代の「風土記」以来、折々に各地で編まれてきた地誌(地域の文化や歴史をまとめた書物)は、先人の熱意と努力によって地域の歴史文化が営々と守り伝えられてきたことを教えてくれます。

江戸時代の丹波篠山でも、複数回にわたって地誌が編まれています。なかでも「丹波志」の編さんは、丹波国全体の網羅をめざす一大プロジェクトでした。



▲丹波志(市史編さん課所蔵)

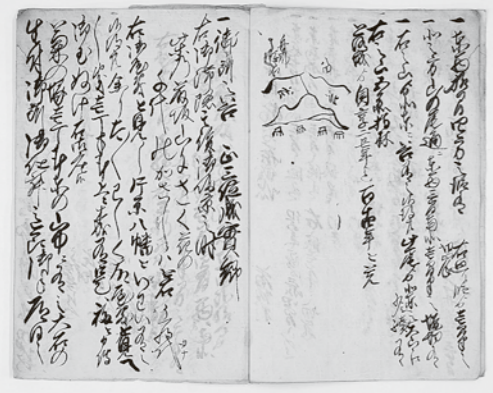
「丹波志」の編さんにあたったのは、福知山藩士の古川茂正と、篠山藩士の永戸貞著です。古川が天田・氷上・何鹿の3郡を、永戸が多紀・桑田・船井の3郡を分担し、完成がめざされました。ところが、両者ともに草稿の作成段階で亡くなったため、丹波一国を対象とした地誌は未完となったのです。

現在、私たちが目にするこの「丹波志」は、古川茂正の子正路が福知山藩主の命によって遺稿を整理し、寛政6(1794)年に天田・

氷上・多紀の3郡についてまとめたものとなります。2024年の現在から数えて、ちょうど230年前のことです。

市史編さん課では、今年に入り、篠山藩領の向井組大庄屋などを務めた高橋家から伝来の歴史資料を借用することができました。数千点におよぶと見込まれる大きな史料群ですが、古文書調査において最も重要な歴史資料目録の作成に当たっては、地域資料整理サポーターの皆さんが大きな力となってくださっています。

先日、サポーターの一人から、明和6(1769)年の年紀を持つ「系図并古城跡之類書」と銘打たれた史料が整理の過程で見つかったことを教えていただきました。



▲高橋兵左衛門による藤坂村中馬氏居城跡の記述 [明和6年「系図并古城跡之類書」高橋家文書から]

この調査から9年後の安永7(1778)年、永戸は志半ばで亡くなり、彼の遺稿が完成した地誌となつて日の目を見る寛政6(1794)年までには、さらに16年の歳月を要しました。合わせて四半世紀という歩みを考えると、地誌編さんの息の長さに思いをいたさずにはられません。

同時に、さまざまな人々によって紡ぎ出される人間関係をよりどころとすることによって、初めて地域の歴史文化を守り伝えることができるというところを、高橋家の古文書は教えてくれているように思います。

江戸時代に編さんされた主な地誌

地誌	編年	編者
篠山領地志	貞享4(1687)年	奈良由禪 太田資置
篠山封疆志	享保元(1716)年	松崎蘭谷
丹波志	寛政6(1794)年	古川茂正 永戸貞著
両縣指掌 (多紀郡明細記)	嘉永年間 (1848～54年)	大石貞吉

※人名の読みには諸説あります。